
英雄の詩

はなだりょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の詩

【Nコード】

N2828BA

【作者名】

はなだりよう

【あらすじ】

英雄の証、その在り処を僕は知っている。

酒と嫌味だけが趣味の、老いぼれたみすぼらしい男。

彼はかつて人々から勇者と呼ばれていた。

この世界でただ一人だけが持つという英雄の印を額に宿して生まれ
た運命の子供。

少年は健やかに育ち、青年となり、勇者となり、仲間を従え、魔王
討伐の旅に出る。

数多の困難を乗り越え、死闘の果て、魔王を葬り去る事に成功した
勇者。

彼が世界を救ってから30年。

魔王の居なくなった世界は果たして平和になっただろうか。

現実、そんなゲームみたいにはいかない。

彼によって救われた世界中の人々は、己の生活と欲と自尊心の為に
日々お互い競い合い、奪い合い、罵りあう。

魔王と、魔王の率いる魔物達が世界から去った事で、人類の文明は
何者にも阻まれる事なく、目覚ましい速度で発展していった。

高度な文明がもたらしたのは人間同士の対立。

魔物の居なくなつた世界で、人々は「人間」を敵とするようになった。

自分が命を賭して守つたものは一体なんだったのか。

それだけの価値がこの世界にあつたのか。

こんなものの為に散つていった尊い仲間達の命。

献身的で優しい奴から先に死んでいく。

利用されて、搾取されて、枯れ果てるまで。

魔族との戦いが終わつても、この不条理なルールはこの世界から消え去らない。

強欲で他人任せな奴らがどんどん肥え太っていく。

人類の本当の敵は一体なんなのか。

魔王や魔物が居た頃は逆によかつた。

人々は魔物達から己を守るため、一丸となって戦った。

敵は「魔物」だけだった。

人々の心はひとつだった。

魔王が死んで、魔物が消滅して、人々の心は幾つにも離反した。

宗教観による民族紛争、国家同士の対立、企業同士の潰しあい、それが人々の望んだ「健全なる世界」の姿。

己の利己のために他者を利用し、邪魔であれば叩き潰す。

それが「正しき資本主義経済」と呼ばれる時代。

魔王の君臨する世界の終焉と同時に、英雄の時代も終わった。

敵は「降臨するもの」ではなく、「演算によって導き出すもの」となった。

かつて勇者だった男は思い耽る。

自分のした事は正しかったのか。

答えは無い。

「こんな世界」をもたらした英雄に賞賛を送るものは、もはや誰も居ない。

酒だけが老いた彼の傷を慰める。

酒を飲む度「昔はこうじゃなかった」などと皮肉を吐く。

街の酒場でも煙たがられる堅物親父。

英雄の末路。

そして今、再び魔王が蘇る。

人類を飲み込む混乱と恐慌。

世界にただ一人、額に「英雄の証」を宿す老いぼれた勇者は、立ち上がらない。

世界が破滅の危機に瀕しているというのに、剣ではなく酒瓶を握り続ける勇者。

魔王を倒す事は、英雄の印を宿した彼にしか叶わない。

どんな屈強な戦士も、どんな英知に長けた魔法使いも、魔王に致命

傷を与える事は出来ない。

この酒に溺れた「おちぶれ勇者」だけが世界を再び救う事が出来る。

世界は乞う。

救いを。

人々の願いに応えようとしない勇者に対して、次第に憤りを募らせる民衆。

「英雄の証は、この世界で必ず一人の人間にしか与えられない。ならば魔王に立ち向かおうとしないあの老いぼれを殺せば、新たな英雄が誕生するのでは？」

過激派の新興宗教者達は、新たな英雄の誕生を欲し、かつての英雄の命を狙うようになる。

命からがら街から逃げ延びるも、行く先々で「かつて自分が命を救った人間達」から命を狙われる老いた勇者。

ある日、例の如く宿屋で襲撃を受けた際、一人の少年に助けられる。

「こつちだよ！こつちからなら誰にも見つからずに逃げられる！」

少年に手を引かれ、洞窟を抜け、どうにか安全と言える場所まで逃げ延びる事に成功する。

「少年、なぜ魔王と戦おうともしない、私みたいな老いぼれを助けた？慈悲のつもりか？」

少年は少し躊躇い、でもすぐに真っ直ぐな瞳を老人に向け、応える。

「俺の親父は、この町の教会が行ってる『魔女狩り』から、ひとりの少女を守ろうとして死んだ。最初は馬鹿だと思ったよ。この町では教会の教えは絶対だし、魔女は俺たちの生活を墮落させる。魔王の遣いとすら呼ばれてる魔女を助けるために命を落とすなんて、本当に馬鹿な親父だって。親父が命を落とす原因になった魔女を恨みもした。俺はなんだかんだで親父の事が好きだった。昔から直情的で抜けたトコあつたけど、でも、やっぱり根はいい人だった。好きだった。大好きな親父を死に至らしめた魔女。親父が命を賭して助けたのに、礼すら言わない。心底憎かった。許せなかった。こんな奴の為に親父は死んだのかつて。だから、親父が助けたその魔女を、俺は教会に引き渡した。魔女は火あぶりにされて死んだ。刑に処される魔女の悲鳴を聞いた。俺は、自分のした事が本当に正しかったのか、今でも解らないままでいる。正しかったはずなんだ。俺は悪を裁いた。正義を為した・・・はずなんだ。なのに、あの日からず

つと、心は晴れないままでいる。いつかは自分の行いに納得がいくと信じて今日まで過ごしてきた。けど結局納得いかないまま日々は過ぎて、今日に至って、信仰者から狙われてるあんたを見つけた時、俺の中に一つの強い感情が芽生えた。もう後悔したくないって思った」

老人を見据える少年。

老人は思う。

かつてその瞳を観た事がある、と。

そう、かつて鏡に映った、英雄だった頃の自分の瞳と同じそれ。

「礼は言わんぞ。こんな程度の事で、心を入れ替えて世界を救おうだなどとも思わん。わたしはもう勇者を辞めた。ただの落ちぶれた老人だ。貴様のした行いはただの偽善だ。だから礼は言わん」

老人の意地。

「いいよ、別に礼の言葉なんか貰っても腹が膨れるわけじゃない。この町じゃ感謝より一切れのパンの方がよっぽど貴重だよ。別にあんたに感謝されたくて助けたわけでも、あんたに再び剣を握って欲しくて助けたんでもない。ただもう後悔したくないから、俺は俺の為にあんたを助けた。ただそれだけだ。どこへでも逃げたらいい」

真っ直ぐ見つめる少年の瞳に、一瞬躊躇い、しかしやはり30年かけて捻じ曲がった根性はそう容易く「感謝」を示さない。

無言で老人が立ち去ろうとした時。

「いたぞ！あいつらだ！あの小僧も共犯者か！捕まえて始末しろ！」

「やっべ！見つかった！逃げるぞおっさん！逃げ！俺はこんなくだらねえ事に巻き込まれて死ぬのはごめんだよ！」

「少年、おまえ・・・」

「うるせえ！逃げるんだ！はやく！うつ！！」

「どうした少年！」

「くっそ！あいつ！くそつたれ！撃ちやがった！やべえ！血がとまらねえ・・・これちよつとマジやばいわ、無理かも。おい、おっさん、ぼーつとしてんな！俺を置いてさっさと逃げる」

少年の胸に真つ直ぐ突き立つ矢。

「出来るかよ馬鹿たれが！死にたく無いと言ったばかりだろう！」

「わかんदार。これだめ。むり。致命傷。アウト。置いてけ。あなたにもまだ遣り残した事があるだろ。『世界を救う事じゃない』。

『あなたの人生を生きること』だ。あなたは生きる」

「少年！」

迫る教会の兵士。

「糞っ！糞っタレが！」

事切れた少年を置いて逃げる、老いた勇者。
その瞳に暗い火が灯る。

2年後。

「目覚めし魔王よ。わたしと交わそう。剣じゃあない。そう、契約だ。わたしは世界を見たよ。貴様を切り伏せ、世界に平定をもたらしたつもりになり、そして世界を、人を見た。今わたしは願う。貴様と一つにならん事を」

世界で唯一魔王を葬る力をもった英雄は、魔王に契約を持ちかける。

ニタリと笑みを浮かべる魔王。

「一度は貴様に刻まれたこの身体だが、恨み言は言うまい。命を賭して剣を交わした仲だ。人間が憎いか。解るさ。我とて理由も無く魔王となったわけではない。人の愚かさを我は知っている。貪り、奪い合い、憎しみあう。醜い生き物だ。滅ぶべきなのだよ。それこそがただ一つ、平等に与えられる救いなのだ。よかろう勇者よ。我とひとつになるうぞ。我の中で永遠に生き続ける事を許そう。世界の破滅を共に見届けようぞ」

眩い光に溶け、融合する魔王と勇者。

刹那、剣をかかげる少年。

2年前、落ちぶれた勇者を助け、命を落とした少年の弟。

「今だ！やれええええええ！」

雄叫びをあげる魔王の7つ目の顔。

老いた勇者の名残を残すその悪魔の顔。

「貴様！謀ったか！！しかし勇者である貴様は我と一体になった！もはやこの世界に我に害為す事許される存在など有りはしない！！！」

「あるんだよ」

少年は、かかげた剣を魔王へと振り下ろす。

2年前。

「兄ちゃん！兄ちゃん！！何やってんだよバカヤロウ！兄ちゃんまでこんな馬鹿やって！なんであんな英雄とも呼べないやつ助けて兄ちゃんが・・・母ちゃんもいなくて、親父も死んで、兄ちゃんまではないなくなったら俺どうしたらいいんだよ！兄ちゃん！！！」

「憎いか。貴様の兄が命を落とす原因となった私を憎むか」

暗い瞳で少年に語りかける老いた勇者。

「憎くないはずがないだろ！お前が現れなければ兄ちゃんは死ななくてすんだ！お前が英雄の役目をちゃんと果たして魔王と戦ってくれてれば、兄ちゃんは死なないですんだ！お前が、お前がっ！！」

「許せとは言わんよ。貴様の言うとおり、私が貴様の兄の命を奪つたも同然。貴様にこの命を委ねよう。教会に差し出すか？それとも貴様が自らこの身を刻むか？好きなほうを選べ」

兄を失ったばかりの少年は、兄と同じ色の瞳で老人を見つめる。

「憎いよ。憎い。お前なんかっ！・・・けど！」

老人を貫くものは剣でなく、少年の瞳。

「それでも許す事を選ぶのか。貴様は、それでも許すのか。貴様の兄にしても、何故だ？愚かしいとは思わんか？死ぬべきものが生きて、生きるべきものが死んで、こんな世の中を憎いとは思わんのか？なぜだ」

「親父も、兄ちゃんも、自分の信じる事を貫いて死んだ。俺にも親父や兄ちゃんと同じ血が流れてる。親父の、兄ちゃんの血を、魂を汚したくない」

「だから許すのか？血も、魂も、一切れのパンほどの価値も無いと

貴様の兄は言っていた」

「解らないよ！俺だってそう思うよ！あんたの命なんかより、明日のパンの方が断然大事だよ！でもっ！」

暗い瞳の老人。

それを見つめる少年の目に雫。

「みんな、親父も、兄ちゃんも、いつだって精一杯生きてた。精一杯の結果死んだ。兄ちゃんを撃った教会の人だってそうさ。みんな精一杯なのに、時々間違いをして、結果誰かが傷つく。そんな現実を抗いたくて、きつと親父も兄ちゃんも、命を賭したんだ。教会を妄信するほど俺だって馬鹿じゃない。この世界がどんなけ馬鹿馬鹿しい原理で動いてるのか、解らないほど馬鹿じゃない」

嗚咽。

「あんだだつて、命賭けて一度は世界を守った。きつと本当に精一杯だったはずだ。それでもあんたが命を賭けて救ったこの世界で、俺たち人間は人間同士でこうやって争って、再び魔王が降臨した今、あんたがなんで剣を取らないのか、俺には、あの親父の息子である俺には、あの兄ちゃんの弟である俺には、分かっちゃうんだよ・・・」

「嘆くか、少年。懐かしいな。私にもあつたよ。嘆いた頃が。人を、世界を、運命を呪った。嘆いた。どれだけを救っても、心は空虚なまま。心のどこかで感じているんだ。自分の行いが無為である事。人の愚かさを、私は知ってしまったている。人の世を守るために剣を

握る事はもう出来ない。わたしは」

「それでも!!」

少年が遮る。

「じゃあなんで生きてるの！なんで生きるの！呼吸をして、俺たちは、こんなにようしようもなく、馬鹿で、愚かで、だけど！」

「70年生きたって幸福な瞬間は1年分にも満たないかもしれない。残りの69年分は『醜いもの』と向き合う事になるかもしれない。それでも、俺は諦めたくないんだ。あんたが剣を捨てた理由も解るでも、剣を握った理由も俺には解るんだ。俺には、英雄の証も、剣の技術もないけど、解るんだよ。あんたがなぜ剣に命を賭したのか。運命を背負ったのか」

「変えたいか？運命を」

涙も拭わず老人を見つめ続ける少年。

「変わらんよ。魔王を倒しても変わらん。命を賭しても変わらん。世界は変わらん。人は変わらん。それでも変えたいと願うか？」

少年は目を逸らさず、瞬きもせず、涙をしたたらせて老いた勇者を

見つめる。

「容易くはないぞ。世界を、運命を変えたいと願う時、そこに必要なのは英雄の証でも、物事を根底から覆せる権力でもない。どれだけ矮小に見える一步でも、それでも歩みを重ね続ける強さだ。何度折れて立ち止まっても、再び立ち上がり、歩みだす強さだ。100にとどかなくとも、1を重ね続け、願い続ける強さだ。貴様にはあるか？その強さが、覚悟が。貴様にはあるか？私には無かった。私にあつたのは、ただ一つ、英雄の証、魔王を葬る力。ただそれのみ。わたしには、信じ抜く強さがなかった。だから私の心は、剣は折れた。貴様は、貫く心を示すか」

「忘れてたくないんだ。母さんが生きてた頃、親父が釣って来た魚を皆で食べて笑った。兄ちゃんといたずらして怒られて、殴られそうになった時、兄ちゃんが俺を庇ってくれた。忘れてたくない。あんたが守ってくれたこの世界で、あんたが失望したこの世界で、俺たちはその笑う事ができた。たくさん嘆いたし、沢山呪ったけど、でも、それでも笑えたよ。忘れてたくないんだ、笑った日の事。あんなだってそうさ。ほら、あんた今笑ってる。折れた、逃げた、捨てた、そういうあんたですら、ほら、今笑ってる」

「笑っているのか、私は。何故」

真っ直ぐ瞳を傾ける少年に、自覚無く微笑みかけている老人。

「ああ、そうか。嬉しいのだな。私は嬉しいのだ。潰えたと思つて

いた願いが、自分の中にもまだ残っていた事を、貴様の中に見た。私は私の答えによく辿りつけたよ。少年、約束を守ろう。私はこの命を貴様に捧ぐ。貴様の剣となるう。ひとつずつだ。ひとつずつ涙を拭う旅になるぞ。魔王を打ち破る力を得ても、この星から涙の全てを拭う事は出来ない。それでも、己の無力さを嘆くな。ひとつずつ、その涙に手を差し伸べ続ける強さを約束できるか？さすれば私は貴様の剣となるう。私には魔王を倒す資格がある。この老いた肉体では叶わないだろう。貴様に託そう。継承する意志はあるか？」

無言でうなづく少年。

少年の剣に胸を裂かれ悲鳴をあげる魔王。

「きさま！なぜ！なぜだ！！！」

「私が貴様の血肉となって、内側より英雄の力を発動させた。老いた今の私に貴様の肉体を断ち切るだけの力はもはや無い。その役目は少年に託した。私は貴様を封じる。そして少年が貴様を断つ」

「違う！なぜ貴様はそうまで！人の醜さを知って、愚かさを知って、それでもなお、救おうとする！？解せん。我は貴様を理解できない。諦めたのでは無かったのか。捨てたのではなかったのか。だから我はこの世に再び肉体を取り戻した。貴様の魂は確かに折れたはずだ！」

「折れたよ。確かに。しかしこの無垢なる少年が私に再び決意を与えてくれた。私は信じる事にするよ。何度折れてもそれでも立ち上がる人間の意志を」

「馬鹿な！愚かだ！貴様は！愚かだ！」

「少年よ、私ごと貫け。とどめを」

少年は再び剣を掲げる。

そして。

「ちがう。やっぱり違うよ。気高い誰かの命を犠牲にして、そうやって紡いで、それはやっぱり違うよ。これじゃあまた繰り返すだけだよ。俺たちが挑むべきなのは、敵を倒す事じゃない。俺も、俺の答えが今やっと出た。2年かかった。親父が死んで、兄ちゃんが死んで、あんたと出会って、2年だ。あんたから学んだ。でも俺の答えはあんたと違う。俺はあんたもやっぱり救うよ。駄目なんだ。何かを犠牲にしなきゃいけないこのやり方じゃあ駄目なんだ。俺の中で、親父の血が、兄ちゃんの血が、そう言ってる」

共存を。

忌むべき悪意、醜悪なる姿、正すべき過ち、否定するべき弱々。

人間の孕むあらゆる愚かしさ。

「断つ」事じゃない。

断つ事じゃなくて、共存する事を俺は選ぶよ。

容易くない事は知ってる。

人は過ちを犯す。

過ちが形を成した姿。

魔物。

人。

敵。

屠る剣より、繋がる糸を望むよ。

目に見えなくても、探す事を諦めはしない。

手に掴めなくても、手を伸ばす事を諦めはしない。

たとえ意志が折れても、再び。

たとえ立ち上がれなくなっても誰かがこの意志を継承して。

俺が、あなたが、本当に望んだ結末は、「魔王討伐」じゃなかったんだ。

だから魔王を倒したって物語はハッピーエンドにはならなかった。

みんな精一杯なのに、傷つく人がいて、悲しむ人がいる。

俺には英雄の証も、魔王をぶった切れる力も無い。

あっても、きつとやっぱこの結末を選ぶ。

共存を。

許せないものを、それでも許そうとする強さ。

母親を殺した魔物が憎い。

父親を殺した魔女と教会が憎い。

兄を殺したあんと人間が憎い。

何もかもが憎いよ。

愛するものを沢山奪った。

悲しくないわけじゃない。

もうどうしていいか分からないくらい悲しいから、復讐じゃなくて、討伐じゃなくて、こんな悲しい事が少しでも減るように。

少年の手から剣が零れ落ちる。

差し出すのは手。

「ごめん、勇者のおっさん。あんたとの約束守れない。俺はこいつを斬れないよ。模索しようと思う。容易くない事は解ってる。でも」

20

共存の道を。

だって、そう望む心があるんだから。

可能性は、いつだって心が生むんだ。

「ああ、ありがとう」

魔王の声だったか、勇者の声だったか。

そして数年後。

魔族と人間の争い、人間同士の紛争は未だ無くならない。

憎しみも、争いも、悲しみはこの世界から無くならない。

ただ、その全てに抗おうとした男が一人いた。

それだけの話だ。

この物語に大団円は無い。

続いているからだ。

誰かの心に宿る小さな願いを継承して今を生きてる僕らが、この物語の一部を演じ続けている。

誰かが願う。

戦争の終わりを。

誰かが願う。

悲しみの終わりを。

誰かが願う。

誰かの笑顔を。

願いが潰えない限り、この物語は終わらない。

僕の魂は知ってしまったている。

僕は語り継ぐ吟遊詩人だ。

僕に名前は無い。

僕は僕であり、あなたであり、見知らぬ誰かでもあるからだ。

あなたが小さな光を願う時、笑顔を願う時、そうやって笑う時、あなたの顔に、英雄の証が現れる。

笑顔。

名前を持たない僕に語れるのはここまでだ。

この物語の続きは君が。

託すよ。

続きを綴るための証は、今、君のその胸の中にある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2828ba/>

英雄の詩

2012年1月7日06時49分発行